

オミナエシの語源・方言・名称史等

横山 健三

1. ヲミナヘシ・オミナエシは、どうして、そう呼ぶのでしょうか。

・奈良時代はヲミナヘシ、今はオミナエシ

奈良時代の音韻：ヲ (wo) 今：オ (o)

奈良時代：[へ] に二種類 fe 甲類、fë 乙類と区別

ヲミナヘシのへは fe 甲類である。

へ (屁) は甲類か乙類か不明である。これが分かれば是非が判るのだが、まだ疑問が残る。

(大意)「ヲミナヘシと秋萩とを手折りなさい。旅行のお土産を(といて)、欲しがる子のために。」という意の歌があります。

オミナヘシとアキハギとを子供のお土産にしたら、どうかという老人の、孫を思う心が詠みとれます。(この時代にオミナヘシとアキハギを、お土産にすることがあった。!)
万葉集・巻第十七 大伴家持の歌・原文(省略)

(読下) 秋の田の穂向見がてりわが背子が
がふさ手折りける女郎花かも
(ふさは沢山の意)

(大意)「秋の田の穂の模様を見がてら、わが背子が みんな手折ったヲミナヘシです。」

2. ヲミナヘシ(女屁為)の説(ヲミナヘシの論)

万葉時代に通ずるか、どうか。万葉時代の臭気論は、いかに。万葉集に見る女屁為論。

今、語源説で、有力視されているのは 5 (後述、語源説参照) の、女押し・女庄しという説ですが、何故か説得力がないので、愚説を考えたのです。

ヲミナヘシの名前の由来について、まだ他の解釈もあるかも知れません。

万葉集・巻第十(原文) 手取者 袖井丹覆 美人部師
此白露丹尔 散卷惜

(読下) 手に取れば袖さへにほふ女郎花
この白露に散ら巻く惜しも

(大意) 手に取ると袖までも色づくヲミナヘシが、この白露で散るのが惜しい。と、解釈しています。
(日本古典文学大系・岩波書店)

「にほうオミナヘシ」を「色づくヲミナエシ」と、解釈しています。

手に取れば袖さへにほふヲミナヘシは、事実・実際に、花はニオイ・匂いがあります。

手に取ると袖までも、匂うヲミナヘシの花が、朝の白露で散るのが惜しいよ、と詠んだ歌と思います。ヲミナヘシは愛されたのです。

江戸時代の『広益地錦抄』に、花は、かね・お齒黒の匂いがするとあります。

かね(鉄漿)はお齒黒。鉄漿で歯を黒く染めることをかねつけとも、はぐるめともいう)

万葉集・巻第八 秋の七草の一・萩の花尾花葛花ナデシコの花オミナヘシまた藤袴朝貌の花

万葉集・巻第八 石川朝臣老夫の歌・原文(省略)

(読下) 女郎花秋萩手折れ玉抵の道行裏
と乞はむ児がため

オミナヘシを家に持って帰り、どうしたか、どう処理したか、が問題・疑問です。

答は、壺・ツフ(ツボの古語)に入れて飾ったであろうということ想像します。

水の入った壺に入れて家に飾ったこと・それが腐り臭気を発したことが考えられます。

それから、女屁為という説を考えたということです。類推・想像することからです。

万葉の時代には、家に花を持って帰る風習があったことが判ります。生け花の原形。

3. 参考資料

(A) オミナエシの方言

1. アオバナ [長野] 更級郡、[岐阜] 吉城・飛騨
2. アカバナ [和歌山] 新宮市
3. アネバナ [山形] 北村山郡
4. アワクサ [静岡] 富士市
5. アワゴメバナ [青森] 上北郡
6. アワバナ [岩手] 上閉伊郡、[熊本] 玉名市
7. アワジナコ [岩手] 和賀郡
8. アワッコバナ [岩手] 江刺市
9. アワバナ [青森] 八戸市・津軽・中津軽郡・上北郡・下北郡・二戸市、[岩手] 岩手市・九戸郡・紫波郡・上閉伊郡・下閉伊郡・稗貫郡・江刺市、[宮城] 気仙・柴田郡・加美郡・黒川郡、[山形] 北村山・最上郡、[福島]、[新潟] 刈羽郡・東蒲原郡、[長野] 上田市・上

- 伊那郡・下伊那郡・東筑摩郡、〔群馬〕
勢多郡、〔岐阜〕飛騨・大野郡、〔静
岡〕、〔和歌山〕伊都郡、〔鹿児島〕鹿
児島市・薩摩
10. アワボ [青森] 上北郡・下北郡
11. アワボー [青森]
12. アワボンバナ [岩手] 九戸郡
13. アワモリ [島根] 美濃郡 防州
14. アワンバナ [秋田] 鹿角市、〔宮崎〕西諸県郡
15. オギナエシ [和歌山] 日高郡・那賀郡
16. オギナメシ [和歌山] 日高郡
17. オフナエシ [和歌山] 東牟婁郡
18. オボンバナ [長野] 伊那谷、〔栃木〕、〔静岡〕富
士、〔滋賀〕彦根市
19. オミナイシ [愛媛] 周桑郡
20. オミナエシ [長野] 伊那谷、〔京都〕、〔岡山〕久
米郡、〔島根〕美濃郡、〔岡山〕
21. オミナヘシ [青森] 中津軽郡、〔岩手〕、〔宮城〕、
〔長野〕伊那谷
22. オミナベシ [新潟]
23. オミナメシ [青森] 中津軽郡、〔福島〕会津、〔千
葉〕印旛郡、〔愛知〕、〔三重〕、〔福岡〕
久留米市、〔長崎〕長崎市
24. オメナメシ [長崎] 長崎市
25. オモナメシ [新潟]
26. オンツツ [新潟] 東蒲原郡
27. オンナエシ [和歌山] 東牟婁郡、〔鹿児島〕始良
28. オンナメシ [兵庫] 赤穂市、〔岡山〕、〔福岡〕八
女市、〔佐賀〕藤津郡、〔熊本〕玉名
29. カルカヤ [宮城] 気仙、刈田郡・伊具郡、〔福
島〕、〔新潟〕刈羽郡、〔奈良〕宇陀、
〔鳥取〕岩美郡
30. キーバナ [長野] 伊那谷、〔鹿児島〕種子島
31. キイバナ [長野] 伊那谷
32. キイロボンバナ [栃木]
33. キカネハナ [山口] 長門市
34. キバナ [鹿児島] 阿久根市・肝属郡
35. キョバナ [鹿児島] 曾於郡
36. キヨバナ [鹿児島] 曾於郡
37. コージクサ [福島] 相馬
38. コージグサ [福島] 相馬
39. コージバナ [福島] 相馬、〔埼玉〕秩父
40. コガネ [岩手] 胆沢郡・和賀郡
41. コガネグサ [岩手] 胆沢郡
42. コガネバナ [岩手] 下閉伊郡・和賀郡、〔秋田〕雄
勝郡、〔宮城〕玉造郡、〔山形〕東田
川郡、〔新潟〕中蒲原郡、〔山口〕
43. コゴメバナ [島根]、美濃郡・能義郡・鹿足郡、〔広
島〕比婆郡、〔島根〕
44. チトメクサ [新潟] 佐渡郡
45. ツキミクサ [千葉] 山武郡
46. ツキミバナ [千葉] 山武郡
47. デシノハナ [熊本] 下益城郡
48. トチナ [山梨]
49. ナワバナ [岩手] 九戸郡
50. ニンジグサ [長野] 上伊那谷・下伊那谷
51. ノバナ [鹿児島] 肝属郡
52. ヒガンバナ [栃木]
53. ホトケグサ [奈良] 吉野郡
54. ホトケグサ [奈良] 吉野郡
55. ボニバナ [岡山] 苫田郡
56. ボンバナ [宮崎] 東諸県郡
57. ボンバナ [青森] 南津軽郡・中津軽郡・上北郡、
〔岩手〕九戸郡・下閉伊郡、〔秋田〕南
秋田郡・鹿角市、〔福島〕、〔長野〕上
伊那谷・下伊那谷、〔栃木〕、〔群馬〕
山田郡・多野郡、〔埼玉〕入間、〔山
梨〕南巨摩郡、〔岐阜〕益田郡、〔静
岡〕磐田郡・富士郡、〔奈良〕十津川・
吉野、〔滋賀〕彦根市、〔鳥取〕、〔島
根〕那賀郡・鹿足郡・邑智郡、〔鹿児
島〕鹿児島市・垂水市・加世田市・指
宿市・川辺郡・伊佐郡・始良郡
58. ミソバナ [山形] 村山市・飽海郡

(B) オトコエシの方言

1. アオバナ [岐阜] 吉城郡・飛騨
2. アジサエ [青森] 全津軽
3. アワバナ [新潟]、〔長野〕・上田市・北伊那郡、
〔岐阜〕飛騨
4. アンジサエ [青森]
5. アンツサエ [青森]
6. オーズチワ [山形]
7. オーツチ [茨城] 水戸市
8. オーツチワ [山形]
9. オーツツ [新潟] 刈羽郡
10. オートチ [岩手] 岩手郡、〔和歌山〕日高竜神
11. オーバコ [新潟] 東蒲原郡
12. オットメシ [岡山]
13. オトコエシ [長野] 上伊那・下伊那、〔京都〕、〔栃
木〕
14. オトコデシ [長野] 上伊那谷・下伊那谷
15. オトコナエシ [和歌山] 東牟婁郡
16. オトコナニシ [和歌山] 東牟婁郡
17. オトコヘシ [長野] 上伊那谷・下伊那谷
18. オドゴヘシ [青森] 中津軽
19. オトコメシ [岩手] 岩手、〔鹿児島〕加世田市
20. オナデシ [秋田] 北秋田
21. オボンバナ [栃木]
22. オミナエシ [長野] 上伊那・下伊那

23. オミナヘシ [宮城] 気仙
 24. キーバナ [鹿児島] 熊毛
 25. キバナ [鹿児島] 肝属
 26. コージクサ [福島] 相馬
 27. コージグサ [福島] 相馬
 28. コージバナ [福島] 相馬
 29. コガネバナ [秋田] 雄勝、[宮城] 玉造
 30. コゴメバナ [島根]
 31. コメバナ [岩手] 岩手、[新潟] 東蒲原・柏崎・刈羽
 32. シロアワバナ [青森] 津軽、[岩手] 上閉伊・下閉伊・二戸、[秋田] 北秋田・鹿角
 33. シロオナデシ [秋田] 北秋田
 34. シロオミデシ [秋田] 北秋田
 35. シロオミナエシ [山形] 東村山、[長野] 北佐久
 36. シロオミナヘシ [宮城] 刈田
 37. シロオンナメシ [熊本] 玉名
 38. シロカネバナ [山口]
 39. シロコゴメ [島根] 能義
 40. シロノオミナエシ [長野] 上伊那谷・下伊那谷
 41. シロボンバナ [栃木]
 42. チトメクサ [佐渡]
 43. チドメクサ [山口] 厚狭
 44. ツチナ [和歌山] 日高郡
 45. トチナ [長野] 上伊那谷・下伊那谷、[滋賀] 坂田、[静岡]、[愛知]、[高知] 土佐
 46. トチバナ [長野] 上伊那谷・下伊那谷
 47. トチンナ [長野] 上伊那谷・下伊那谷
 48. ニンジングサ [長野] 上伊那谷・下伊那谷
 49. ノドクロ [鹿児島] 垂水市
 50. ハガガラ [青森]
 51. バカガラ [青森] 全津軽
 52. フワバナ [宮城] 宮城
 53. ボンバナ [青森] 全津軽、[秋田] 南秋田、[長野] 上伊那谷・下伊那谷、[栃木]、[静岡] 富士、[鹿児島] 加世田市・川辺、[新潟] 東蒲原
 54. ワリバナ [埼玉] 秩父
- 『伊呂波字類抄』 茶、オホトチ、敗醬、オホトチ
 『類聚名義抄』 茶、オホトチ
 『古名録』 按ニ紀州日高郡龍神ノ土人其 苗ヲユビキ食フ即呼於保都知蓋シ古語之残也
- 4、オモヒクサ『藻塩草』(1533) 女郎花、さいるんさいの草づくしのに見えたり。
 5、カマクサ『医心方』(984) 敗醬、加末久佐
 6、クチメクサ『医心方』 敗醬、ク知女久佐
 7、コノテカシハ『袖中抄』 このてがしはを女郎花ともいひ、おほとち共いふは同事也
 『山家集』(1190)
 『詞林采葉集』(1363)
 『歌林良材集』(1440)
 『藻塩草』 おほとちをやまとの國にはこのてかしはと云也。いかがかくはいふぞなれば、葉のちごどもの手に似たればかく云也。[前出やまとの国の方言]
- 8、チメクサ『本草和名』 敗醬、知女久佐
 『伊呂波字類抄』 茶、敗醬
 『康頼本草』 敗醬、知女久佐。[前出]
- 9、トチナ『本草綱目啓蒙』 敗醬、信州、土州
 10、ミルナ『本草綱目啓蒙』 敗醬、勢州
 11、ヲトコヘシ 俳諧『増山の井 7月』 おほとちの花を
 とこへし
 12、ヲトコメシ『古名録』 敗醬
 13、ヲトコラミナノハナ『本草綱目啓蒙』
 『古名録』 敗醬
 『万葉集 卷20』(4317)
 14、ヲミナエシ・オミナエシ『本草綱目啓蒙』 敗醬、備前
 15、ヲミナヘシ 20巻本『和名抄』 女郎花 新選万葉集云
 女郎花倭歌云女倍芝く乎美那閉之 今案花如蒸粟也 所
 出未詳
 16、ヲミナベシ 春林本『下学集』(1444)
 17、ヲミナメシ『下学集』(1444 諸本)
 文明本『節用集』(1474)

(C) オミナエシ・オトコエシの名称(双方同物視、漢名から混同する)

奈良時代の万葉集に記録されている名称などは岩波書店(日本古典文学大系)にまとめて掲載してあるので省略

- 1、オトコテシ『袖中抄』(1185) おとこてしというは、おほとちとてをみなべしの様ににしろきなり
 2、オホトチ『康頼本草』(1379) 敗醬、於保川知
 3、オホトチ『新選字鏡』(898) 茶、於保土知、蓀、於保度知
 『本草和名』(903) 敗醬、於保都知、倭名類聚抄、茶、於保都知、

4. 語源説の紹介

1. 女へ氏(ヲミナ・ヒレセリの反)という説

經尊者『名語記 1275年』に「ヲミナヘシ如何、女郎花トカケリ、ヲムナヘシ也。但女ハヲムナナルヘシ、郎花ヲヘシトヨメル如何トナレハ、ヘシハヒレセリノ反ナリ。ヲムナヒレセリチハ、カノ女ノスカタノナマメキタテルカタ、ハヤカニテ、ヤサシケレハ女ニタトヘタルナメリ」とある。(句読点挿入)(花姿ナマメキ・ヤサシ譽え)

2. 女植え市(ヲミナウエシ)の略という説

四時堂其諺著『滑稽雑談所引・和訓義訓』(1712年)「を

みなはをんな也、へしはふへしの略也、此花女の塚より生ると言云故にや」とある。

小学館編『日本国語大辞典』の語源説の(2)に紹介。

3. 男無女花(ヲ男ニ・ナメシ)という説(男でない女の花?)

菅原泰翁編『紫門和語類集』(1737年?)に「ヲ(男)ニ・ナメシ(無女花)義」とある。

小学館編前著の語源説の(5)に紹介。

4. 女成るべし(ヲミナナルベシ)の略と言う説

屋代弘賢著『古今要覧稿』(1821-42年)に「○按似を皆は即女字にてへしの義いまだ詳ならず或はへしはなるべしという語の上略にてもあるべきにやといへるはいかがあらん」かとある。

5. 女押し・女押し(ヲンナヘシ)という説

屋代弘賢同著に「一説此の花美麗にして女の妖麗奈留を押しなりともいへり」とあり何人かの説紹介。谷川士清著『倭訓栞』に「花の色を賞して美女をも押しといふ意か」

6. 女姿為(ヲミナフリシ)という説

大石千引著『言元梯』(1830年)に「ヲミナフリシ(女姿為)の義」とある。

小学館編前著の語源説の(6)に紹介。

7. 女郎好(ヲミナハシ)の点呼かという説

松岡静雄著『日本古語大辞典』(1929年)に「ナデシコと同様に花の姿をめでて歌人等がヲミナハシと称へたのが通称に用ひられるやうになったものであろう」とある。

8. 女飯(ヲミナメシ)という説

牧野富太郎著『花鳥写真図鑑』(1930年)に「人ニヨッテハをみなへしハをみなめしトイフノガ本当デ是レハ其花ガ粟ノ飯ニ似テ居ルカラダト唱ヘルモノガアル、をみなハ無論女デ是レハ其花ノ優シイ所ノ見立テデアラウト思ウ」とあり、紹介。

9. 女見き薬(ヲミナメキシベ)という説

林麿臣著『日本語原学』(1932年)に「女郎花をみなべし」は(女見き薬)の義。

10. 黄如稗子(ウォン、ナ、ペ、シ)という説

本田正次著『花物語り 12カ月』(1969年)に松村任三氏の説を紹介。

5. 愚説の補足と反省

参考資料(A)(B)(C)からは、愚説の女尻為を裏付けるような、積極的な名称は、見られないようですが、下記のような事例からも女尻為の論が考えられます。

花の形との類似からのコウジクサ(麴草)・アワクサ(粟草)とも見られますが、臭気、匂いも考えられます。麴の匂い、粟の匂い。古代人の匂いについての論は面白いと思います。平安時代の倭名類聚抄にオミナエシの花を蒸し粟アワの如しとあります。

私の実験：オミナエシと水とを瓶に入れ、密閉した状態で1か月ほどで、ガス・泡が生じました。オミナエシの葉、茎、根を一緒に入れました。(葉・茎・根だけ別々も)(又、生け花のように水を入れた瓶で、場所を変えて見ることも

しました。一週間。)

草全部(葉茎根)を入れ密閉した瓶では、強烈な臭気、クサイ、匂いが発生しました。

中国の漢名、敗醤と日本の混同。現在、敗醤はオトコエシの漢名とされますが、オミナエシにも使用されました。昔の学者は日本の植物に漢名を当てはめる努力をしました。

オミナエシ・オトコエシの臭気の論は、江戸時代からあります。※奈良時代に遡る。

①伊藤伊兵衛著『広益地錦抄』(1719)に「春、葉は煮て食べられ、味は苦く醤(ヒシホ)の気味あり。花と実の香気は婦人の、お歯黒(かねつけ)の匂い」とあります。(漢字の敗醤はオミナエシとしています。大略)

②植崎直枝著『花守の植物記』に、オミナエシの匂いについて、『よき女に腋臭のある』と一口、申し上げたいと云います。要するにオミナエシは異様な臭気を発生します。

③古沢昭著『とちぎの花』には、玄関の花瓶に生けたオミナエシから、「ネズミの死体がくさったようなにおい」がしたと云います。

④牧野富太郎・菱山忠三郎・伊藤一男の各氏などに、オミナエシ・オトコエシについてのクサイ論があります。

⑤現在・生け花の先生から「特異な臭気が玉にきず。」と、云われています。

◇高瀬豊吉著『薬草の由来伝説と薬効』に「共に香気があつて秋の野を匂わしている。」とあります。人によって、匂いの感覚は違うものです。蓼食う虫も好き好きか。

○参考資料の(A)(B)(C)についても、後ほど考察してみようと考えています。

6. 今後の課題 いろいろの考え・説を発表してみようではありませんか。

奈良時代のヲミナヘシの由来・語源の論は、これからも続きます。

上代特殊仮名遣・一名八母音説を踏まえて論ずることにあります。

万葉集のヲミナヘシの表記：漢字の部 敝・弊、へfe甲類に留意することです。

娘子部四(675)・姫押(1346)・娘部思(1530)・娘部志(1534)・姫部志(1538)・姫部思(1905)・佳人部為(2107)・美人部師(2115)・娘部四(2279)・乎美奈敝之(3943・3944・3951)・乎美奈弊之(4297・4316)
計・十四首

7. 御説・参考意見

増訂『萬葉植物新考』(松田修著・昭和45)・万葉に「袖さへにほふ女郎花」と、歌っているのは「何か女性的なおいが感じられる。」と、述べておられます。